

堺行基の会 会報

第40号

平成26年9月28日

平成二六年三月三十日史跡巡りの記録

春の史跡巡りに参加して

宮本 和

南海・東南海地震発生時の確立が高くなっている今、また想像を超えるさまざまな災害が、いっどこでおこるか解らないこの時期に、浜口梧陵記念館「稲村の火の館」と深専寺を訪れたことは、大変意義深く、多に参考になった。ここで得られた教訓を心に留め、刻み込んで、来るべき時に備えなければとの思いを強く感じた旅であった。

三月三十日は、注意報が出されている雨中、吉田会長はじめ総勢三十五名が参加した。三国ヶ丘駅前を出発し、途中車窓から山中溪の桜と山間いの、赤みを増した山桜を楽しむ、紀の川サーピスエリアで休憩。和歌山は桜が早や満開で、大阪より早く春

発行 堺 行基の会

事務所 堺市毛穴町462-8

吉田方

TEL 072-271-5972

が来ていることを実感した。目的地が近くにつれ雨足もやわらぐ気配が見え、少し安堵した。しかし、河川は濁った水が音をたてて流れており、山間部は相当な雨量であったと思われた。

こんな中、有田郡広川町の「稲村の火の館」に到着し、小雨の中、門前で集合写真の後入館したら、3Dシアターが落雷による停電で修復作業中との事で、先に館内をゆっくり見学することにした。

館内には、梧陵に関する史料が、各方面での活躍を彷彿とさせるがごとく幅広く整えられており、あらためて梧陵の功績に感服した。バスガイドさんに教えていただいた小学国語読本巻十を手に取り、目で追いかけて一読していると、館内放送でシアターが回復し放映できることになったとのアナウンスが流れた。今日は、見られないと思っていただけに、学芸員の方に感謝して急いでシアターへ向かった。



稲むらの火の館・津波防災センター（和歌山県広川町）

まず、東日本大震災の経験と安政の記録に基づいた現代の避難への心得を見た後、浜口梧陵の実話の映像を見た。私には、後の方が脳裏に焼き付いた。津波の恐怖は、東日本大震災時のテレビ画面も勿論であるが、津波が襲ってくる前の、梧陵の決断の早さに、いまさらながら驚いた。この早さ

の基になっっているのは、先人が伝えてきた「津波が来たら早く高い所へ逃げろ」の教えであった。

その根底にあるのは、人の命の尊さであり、財産などは、二の次三の次という、人命尊重の精神であると思われてならない。また、老若男女を問わず平等に接する津波後の悟陵の取り組みは、悟陵の地域への愛着の深さと、これまで育ててくれた人々への謝恩の気持ちのすばらしさが、画面を通



湯浅町の湯浅城で昼食1

じてではあるが、痛いほど私の脳裏に焼き付いた。

次に訪れた「広村の堤防」は、悟陵が心血を注いだもので、堤防を作る時には、災害時に食料となる「実」がつく樹木を植えたと伝え聞き、悟陵の心にくいばかりの配慮を感じずにはいられない。

昼食は、「ちりめん井膳」をいただき、湯浅町の深専寺へ向かった。バスを降りた所に、深専寺の総代の方がおられ寺まで案



湯浅町の湯浅城で昼食2

内をしていただく幸運に恵まれ、行基さんのお陰と感謝。

四十数年ぶりに湯浅町を訪れたが、その時の遠くからのお客さんを迎える暖かい心が、金山寺味噌のにおいととも蘇り、昔のことがなつかしく思い出された。

深専寺は、熊野街道に面し、山門右側にある「ねじき」は、その幹がくねるようになじれていて、訪れた人を圧倒する迫力で我々一行を迎えてくれた。山門左側には、「大地震津波心得え記」碑があり、安政の大地震発生の二年後に建立され、大地震と津波の教訓を後の人へ伝えるためのもの



「津波の心得」石碑
(和歌山県湯浅町深専寺)

で、「地震が起これば、浜辺や川筋には逃げず、高い天神山の方へ逃げること」と、具体的な避難経路を示している。裏面には、

蓄財を寄せた人々の名前を記しているが、震災の二年後に、これだけ多くの人が賛同した理由を、よく考えてみるのも勉強の一つと思った。



行基ゆかりの千光寺（田辺市上秋津）

天気は、回復に向かい、陽ざしもみえ行基さんへ感謝しながら、最終目的地、みなべ町の千光寺へ向かった。到着寸前に雨が

降り、少しの間、傘をさし山坂を登ること数分で山門手前に約千二百年前、「和気清麻呂建立」との石柱がみえ、開山が相当昔と気づく。それもそのはずで、ご本尊は行基の作と伝えられている。本尊の前面に今年年回忌を迎える故人の名前が書かれており、一周忌から五百回忌までであったことに驚き、私の菩提寺でも是非書き出してほしいものだと思った。

帰路は、高速道で若干の渋滞にあったが、さほどのことはなく三国ヶ丘駅前に到着した。今日一日楽しいひと時を過ごしたことを幹事の皆さんに感謝するとともに、行基さんにも感謝する一日であった。

三月三十日参加者名

池田公治・井戸久美子・若井敏明・宇野健二他一名・織田宗輔・小室孝子・岡崎形成・操田邦男・佐藤盛夫・下垣内信夫・仙波恒民・竹安ゆり子・田中延宏・谷口康子・富田房子・鳥居俊作・中野博之・中野昌人・西井幹雄・畑中雄一・東野信吾・前田収・牧野みずほ他二名・宮本和・三好理化夫・松井郁子・吉田靖雄・和田慶三他一名・川口勝・呉時宗他一名

五月二十五日

会員総会開催される

五月二十五日堺市駅のサンスクエアで、平成二十六年度会員総会が開かれました。吉田靖雄会長の挨拶に続き、中井国芳氏が議長に選び、①平成二十五年度事業報告が鳥居俊作事務局長から、②同年度収支決算報告が東野信吾会計委員から、監査報告が操田邦男監事からなされました。ついで③二十六年度事業案が鳥居事務局長から、④同年度予算が東野会計委員からなされいずれも賛成多数で承認されました。

なお会員の提案として、会員名簿を配布してもらいたいとの意見がありました。これについては不必要だとの意見もありました。役員会として、この件を預かり今後検討すること、了承を得ました。

会員の異動では会長の分担する事務を新設の事務局次長一人に移し、同時に会則を訂正することが提案され賛成を得ました。なお事務局次長には、下垣内信夫氏が就任しました。

（吉田靖雄）

平成26年度 事業計画案

行 事	予 定・期 間
1 遊 覧 1 回	平成26年5月25日 26年度事業報告・四半度会計報告 監査報告
記念講演 事務局長 島田俊幸 取次寺真蓮の徳道・供山池の改修・大輪田泊の修復	26年度行専計画案・四半度会計予算案 「行専さんを導いた後援者達」
2 役 員 会	4月・6月・9月・11月・12月 平成27年2月
3 親 友 会 1 回	11月2日 厚市民会参加シンポジウム
4 学 習 会	27年 1月
5 交 際 会 2 回	11月・27年 4月
6 会 報 発 行 2 回	9月・27年4月

平成25年度事業(行事)報告

年 月	行 事	通 詳・行 先	備 考
25.4.21	役員会	サンスクエア	世員協会の準備
25.5.28	役員会	サンスクエア 記念講演	平成26年度事業報告 四半度 決算報告 平成26年度 事業計画案 四半度 予 算 案 副所 事務局長 島田俊幸 伊勢原市の地区づくり
25.6.23	役員会	10月20日の親友会準備・検討	
9.28	役員会	秋の交際 めぐりの準備	
10.20	講演会	吉田博雄会長 藤本誠二筑紫大教授	厚市民会館小ホール
11.11.29	交際めぐり	竹島寺・船山寺・長馬寺 徳田寺・那の字古墳 集会 なごみ	案内 下道内笠草 取野・徳田・吉田・ 各役員
12.24	役員会	サンスクエア 場	1月学習会、茶話会の準備
26.1.28	学 習 会	取次寺会館 北野田駅前	講師 百塚博隆 会長 宮井敏明 副会長
26.2.28	役員会	サンスクエア 場	
26.3.30	交際めぐり	聖金 湯治地 湯治 取次寺 田田 千光寺	案内 島田事務局長 宇野・船波・中井 各役員

会報 25.9 38号・26.4 39号 発行

平成26年度収支決算書

(収入の部)

科 目	金 額	備 考
会 費	235,000円	3,000円×85名
参 加 料	420,000円	交際めぐり98,000円×35名×2回
雑 収 入	60,000円	資料代 利息等
前年度繰越金	518,752円	
合 計	1,253,752円	

(支出の部)

科 目	金 額	備 考
会 場 費	30,000円	会場借用料
通 信 費	50,000円	郵送料
奉 還 費	40,000円	奉還送料等、レジタ
行 事 費	450,000円	交際めぐり 2回
会 報 費	60,000円	会報印刷費 2回
資 料 代	170,000円	2 回
給 費	100,000円	運営事務局 茶話会費等
支出合計	900,000円	
予 留 費	353,752円	
合 計	1,253,752円	

平成25年度収支決算書

(収入の部)

科 目	金 額	備 考
会 費	222,000円	3,000円×74名
参 加 料	402,000円	交際めぐり6,000円
雑 収 入	60,643円	資料代31,500円 10月 13,000円 1月 18,500円 資料10,000円・文庫返19,000円・利息60円
収入合計	684,643円	
前年度繰越金	843,815円	
合 計	1,368,461円	

(支出の部)

科 目	金 額	備 考
会 場 費	24,700円	会場借用料
通 信 費	41,400円	郵送料
奉 還 費	35,534円	印刷 1,934円・チラシ印刷 33,600円
行 事 費	439,836円	11月 218,324円・3月 221,312円
会 報 費	66,700円	5月 25,200円・10月 31,500円
資 料 代	165,900円	10月 92,400円・1月 73,500円
給 費	85,639円	運営料 14,240円・文庫返会費 8,000円 茶話会 6,799円・花 京 4,000円 印刷費 59,600円・運営用紙代 2,600円
支出合計	849,709円	
次年度繰越金	518,752円	
合 計	1,368,461円	

1,368,461円(収入)-849,709円(支出) 518,752円 (次年度繰越金)
内訳 銀行預金 364,424円 現金154,328円 合計518,752円

平成26年4月30日

監査の記録簿正であります

監 査 長 島 田 俊 幸

新春のたたずまいも影をひそめ日常が戻ってきた睦月末日「堺行基の会」恒例の学習会が開かれました。

会場は最もアクセスに恵まれた南海高野線北野田駅前「堺市立東文化会館」です。朝から小雨模様様の天候でしたが駅からは傘いらずで屋根続きの便利な会場です。

平成19年9月9日、最初にこの会場で講演会が開かれた時、この回廊を通った私は不思議なエナジーのお導きで会場迄引き寄せられ、吉田会長の御講義を聞く事となり鮮烈な衝撃を受けました。久しく忘れていた私の求めていたものが、そこにあつたからです。

その場で即入会、行基さんに心酔しつつ今日に至っている私にとっては思い出深い会場です。

二時からの開場を前に、受付の準備を整え待機、早々と御来場になる熱心な方々の中には見覚えのある常連のカップルも居られ嬉しく思いました(参加56名)

今日の講演のテーマは「行基の弟子たちの動向」吉田靖雄会長、「大仏造営と行基」若井敏明副会長です。



吉田靖雄会長の淡々と語られる行基さんへの深い思いが込められていると常々感じながら資料を追って参ります。泉宿祿高父編纂の「行基年譜」を引用しつつ

① 行基の仕事は弟子との共同事業

大乗仏教圏における最大の福祉事業の実行者であつた行基さんが多くの弟子達

との協同事業で建設した施設は布施屋と呼ばれる宿泊所九ヶ所、橋梁六ヶ所、溜池十五ヶ所、用水路網七ヶ所、運河四ヶ所、水門三ヶ所、波止場二ヶ所、道路一ヶ所、でしたが、その一つ一つが大事業でありました。行基さんの常に民衆の幸せを願ひ野に出て説得行動していく姿に、為政者は、行基と弟子等に危険を感じその行動は釈迦の教えに違ひ法令に違反すると糾弾し続けましたが、後に真実が理解されます。当時の人口が六百万と推定される奈良時代、千余人の大集団を危険視したのは無理もない事でしょう。この人数は誇大表現と疑問視されましたが、行基が七二七年に建立した堺市大野寺の土塔からの文字瓦が千二百余点出土し、その大部分の人名を見れば、弟子千余人は事実であつたと証明されます。このように行基と弟子集団は一体であり、行基の名の下に行われた諸活動は弟子集団の活動でもありました。

② 仏教福祉事業と福田思想

釈迦(前6〜5世紀)は一か所に留まることなく遍歴し托鉢行をしながら一生を過ごしました。遊行・托鉢行は出家者の務めであり、在家者は修行者に物心の

布施をする事により福德・功德を得るとされる考え方を福田思想と云います。福田はもと釈迦のみでしたが次第に拡大して衆僧・父母・苦惱する者も福田とされ、更に布施を受ける者から布施の行為迄も意味する様になりました。

大乘の經典では、福田行の果報は、天界に生まれる事ではなく「仏身の功德を得る菩薩の因縁行」「無上の仏の菩提を求む」とされ、福田行は仏陀になろうとする菩薩の修行とされ、更に七福田・八福田と増長されています。

これ等の福田行を整理すると十二種類になります。

- ① 井戸を造り人々に利用させる。
 - ② 園地に果樹を植え、食させる。
 - ③ 樹陰を作る
 - ④ 橋梁を渡す
 - ⑤ 渡し船を設ける
 - ⑥ 浴室・浴池を作る
 - ⑦ 僧坊・堂舎を作る
 - ⑧ 旅客の為の舎屋を作る
 - ⑨ 道路を作る
 - ⑩ 飲食を与える
 - ⑪ 医薬を施す
 - ⑫ 便所を設ける等です
- 行基の院と布施屋は人の居住舎屋だから
①井戸③樹蔭⑧旅客舎⑩飲食物⑫便所が

付属していた筈であり、また六か所の架

橋は④橋梁、⑤渡し船に該当し直道は⑨に該当し、昆陽施院では聾者・盲人・孤児・孤老・病人を収容し医薬の供与も行われました。七十七一年（宝亀二）に大和国十一郡にあつた東大寺の布施屋には数種類の果樹があり、これは行基の布施屋に範をとられるなら、②園地果樹があり、これは行基の布施屋に範をとつたとされるなら②園地果樹があつた事になり、行基の福田行のうち確認できないものは⑥浴室・浴池のみであります。更に行基は波止場・運河・溜池・用水路網等交通施設と農業施設を作っています。これ等は行基が生きた時代の社会的必要に迫られて実践した事業で、民衆の要望に応えた事業で、特徴的な事業でありました。行基の福田業は国内だけではなく東アジア仏教圏における最大最高の物でした。

③ 堺市土塔町大野寺の弟子集団

土塔とは仏舍利を治めた礼拝の施設です。大野寺の土砂で達成した十三重の土塔はピラミッド状の四角錐形で表面を瓦で覆うという特異な形態でその頂上には木製の小さい塔が安置されていたとの事、瓦の総数は六万枚を超える、と言われて

います。

調査により出土した瓦には多くの人名が記され文字瓦の総数は千二百点を越え、この物証により従来疑問視されていた「年代記」の記述は信頼性が高い事が明らかになりました。

また明確に読み取れる僧尼名、在俗信者、僧尼に仕える十六歳以下の童子の参加も解かり俗名も四一〇余例あり、大野寺建立に参加した行基集団は出家の僧尼・在俗の優婆塞・優婆夷・僧尼に仕える童子・俗名の信者の四種類から成り立っていたのです。

④ 大僧上記に見える行基の弟子

「大僧上記」に行基の弟子僧の名が三十四名が記されている。十弟子・翼従弟子・故侍者・親族の四つに分類され土塔出土の文字瓦の中に井淨（翼従弟子）・神藏（故侍者）・帝女（故侍者）の三名の刻名があります。（故侍者）とは行基より先に物故した弟子を意味する事で神藏・帝女の二人は神龜四年（七二七）に、はすで行基の初期の弟子になっており、行基没年（七四九）以前に物故したことになる。

「大僧上記」にみる三十四名の僧徒と土

塔出土瓦の五十名の関係は前者が行基集団のリーダー僧であり、後者はそれに追随する僧徒であったと思われます。リーダー僧には十弟子の上級層と翼従弟子と呼ばれた下級層があり、更にその下に土塔瓦名に見える一般僧尼が存在していたのです。

⑤ 行基没後の弟子らの動向

天平感宝五年（七四九）行基八十二歳で入寂した後、行基の伝記を舍利瓶に刻ましたのは弟子の真成でした。ここには大仏勧進についての言及が無く、真成は師匠らの大仏勧進については評価しない人でした。時の官僚の中には労力と財物の寄進を民衆に強制した為に民衆への課役と同じと解釈された。

真成は行基の親族、大村氏の出身とされ、行基が没した三年後の七五二年四月、大仏開眼法要が営まれ、行基に変わって、菩提遷那僧正が筆を執られた。開眼供養会の儀式が営まれ華嚴経の講義が行われました。

講義の進行を司ったのは華嚴経に対する学識の深い行基の筆頭弟子の景静が行基集団の大仏勧進に対する褒章の意味で選ばれました。

七七三年十一月、行基建立の五院が荒廃した状況を見た光仁天皇は、五院に対し所在郡の田地を施入し復興を命じました。宝龜年間（七七〇～八〇）は行基の功績が評価され、弟子等にも余光が当たった時代でもありました。「大僧上記」や「年代記」はこの時に編纂されたと結ばれました。

「行基と大仏造営」

副会長 若井敏明

昨年五月の総会で副会長に就任された若井敏明先生の講演です。

お人柄そのままに淡々と持論を述べられた内容に私は新鮮な驚異を覚えました。それは三都制の理論です。

奈良時代最大のプロジェクト大仏の造営は単なる寺院造営ではなく、紫香楽宮の造営とリンクしていることで、並行して行われた恭仁京や難波京への遷都と関連したものとして考える必要があるとの事。天平十二年から始まる聖武天皇の東国行幸と、それに続く遷都、さすらいの旅は、当時の時代背景と天皇の心の不安定さがあったと伝えられていました。当時、皇位継承を巡り、天武系か天智系か



ゆれ動く時代、政治的混乱があり、自然界でも地震、火災、天然痘等の疫病流行等の為、遷都が成されていたと思っただけですが、近年の学者達の研究、推測による新説を交えながら若井先生の論は進んでいきます。

唐の三都制は長安・洛陽・大同でこれが

定められたのは開元十一年（七二三）のことであり、この制度が日本に伝えられたのは天平六年（七三四）の遣唐使によるものと推測されます。

それ以降、恭仁京を洛陽に、なぞらえた新都計画が本格化したといわれます。

ここで先生はスクリーンに投映された地図を指しながら三都の場所を適確に図示されたのでよく理解できました。

三都は難波・平城・恭仁の三か所との説もありますが、平城宮の大極殿が恭仁宮に移築されているように恭仁遷都は平城廢都を前提とするものだった事は明らかであり、三都制で説明するとすれば大同石窟から見て、大同は紫香楽宮に他ならないとの見解です。

この二つの都による複都制は既に祖父の天武天皇が構想していたもので、聖武天皇は即位早々難波京を再興して天武天皇の首都構想を継承したものです。然しすでに平城京が長安を模していた為、難波との間に齟齬が生じました。東西に並んだ難波と平城は共に長安型の為、唐の二つの都を模した事にはならないのです。つまり、長安型の平城京は、早晩、洛陽型の新都にとって変わらねばならなかつ

たまでです。それが恭仁京だったのでないかとの若井先生の結論は大いに頷けるものがありました。

続いて遣唐使としての吉備真備と玄昉等の帰国がもたらした唐の三都制や大仏の情報による、聖武天皇の首都構想が若干変化したと考えられる事と行基との関係は如何なるものかと話題は続きますが、紙面の都合上、割愛させて置き、後は資料をご参照の上、聖武天皇と行基が理想実現の為に果たした行程を巡って戴きたいと思います。

大川 法子「記録」



俊乗房重源講演風景

「俊乗房重源」

鳥居俊作

五月二十五日行基の会総会時、三度目の講演①シルクロード ②伊能忠敬地図 つくり泉州大坂を中心に ③今度は行基を尊崇した俊乗房重源の話です。

和泉市の桑原町に「重源上人と桑原伝説」重源上人とはどんな人、鎌倉初期の浄土僧、和泉市の山間部の納花町に谷山池を灌漑建立し、和泉市中心部の農耕に恩恵を与えた又桑原町に、当時宋から持ち帰った、水仙の球根を与え栽培の指導をした。そんなことからこの地区では、八百数十年前から、現代も花卉栽培が盛んな地区で町中経済的に繁栄したところで、町の家は鍛建てばかりです。またこの桑原町に西福寺という、雷に因んだお寺があり、その昔、雷がここに落ち、許してもらったので、この地区には雷が落ちなく、雷井戸が現存しておまけにこの寺では雷除けと耳の病気から護るお札が発行されています。雷が鳴るとくわばら・くわばらと呪文を唱えるのもこの桑原から来たとの説、桑原氏というのは古代の渡来氏族で桑原という地名は全国に多くあります。

その水仙は和泉市の市の花として市民から愛玩されています。

奈良国立博物館では八年前、重源上人御遠忌八百年記念特別展「大勸進重源」が、二年前には東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆「頼朝と重源展」が開催され、この間に二度も重源が登場したのであります。

養和元年（一一八一）八月、大勸進として東大寺再興に乗り出した俊乗房重源は時に六十一歳、行基は七十六歳で余命わずか六年間、一方、晩年の四半世紀に渡り活躍した重源さんは東大寺再興という大事業に捧げたのである。

俊乗堂と行基堂の規模の違いが東大寺に貢献した、二人の僧の東大寺に対する貢献度で、判断できます。

若くして醍醐寺で出家、十七歳で四国を巡歴、その後五度にも及ぶ大峰修行を行うなど、各地の霊山で山林修行に身を投じ、仁安二年（一一六七）四十六歳で入宋、彼の地で日本から商船で渡った明庵、榮西と出会い、阿育王寺に共に詣でた際、舍利殿の修造を請け負った。これが実際に行われたことは重源がその生涯で行った造寺・造仏・施入・事業などをまとめ

た「南無阿弥陀仏作善集」に見える「大唐明州阿育王山、周防ノ国材木ヲ渡シテ舍利殿ヲ起立奉ル、修理ノ為ニ又柱四本虹梁一支ヲ渡シ奉ル」との記述から知られ、さらに南宋の文人楼鑰（ろうやく）「阿育王山妙智禪師塔銘」（一一八八撰）には妙智禪師の偈語に感激した「日本国王」舍利殿修造ノタメニ良材ヲ送ツタこの「日本国王」は後白河法皇を指すとみられ、周防国が安元三年（一一七七）から治承三年（一一七九）に後白河法皇の院分国になっている。重源は後白河法皇の命により、周防国の材木を阿育王寺に送ったと考えられる。

「入宋三度聖人」と自称する豊富な渡宋経験や勸進聖としての実績を通して宋文化に深く関わっていた重源上人は宋からの知識や技術を導入して、東大寺の再興に、あらゆる力を発揮した。

この項「重源」参考

入宋自称三度と取り合わない歴史学者先生達も多いですが、重源展の図録の記述学者はこれを全て認めて否定する先生はおらない。

この頃は、民間交易が盛んで、重源はそれを果たしている。二度目か三度目に

は多くの弟子や信者を従え、東大寺再興の技術者達を引率し連れ帰っている。これが東大寺再興の成功につながっている。

重源（年表より）

- 一一二一 重源誕生
- 一一三三 出家醍醐寺に入る
- 一一四七 源頼朝誕生
- 一一五六 保元の乱 後白河天皇方勝利
- 一一六七 重源入宋（四十六歳）
- 一一六八 商船で入宋した榮西と明州で重源と出会い行動を共にする
- 一一八〇 平重衡、南都東大寺を兵火に
- 一一八一 重源に東大寺造営勸進の勅
- 一一八四 宋人の陳和卿を大仏鑄造師に
- 一一八五 頼朝が千両、秀衡五千両
- 千両・上絹一千疋
- 一一八六 重源 東大寺造営料として周防国を与えられる
- 一一八七 重源 周防国における地頭の妨害を朝廷に直訴
- 一一八九 九条兼実に周防国材木調達の困難を機に大勸進辞退こぼす
- 一一九〇 重源 東大寺東南院を再建
- 一一九三 重源 東大寺造営備前国付与

一一九五 東大寺大仏殿落慶供養

後鳥羽上皇、頼朝隣席

数万騎の武士、寺内、

門外警護する

一一九六 大仏殿脇侍菩薩像の造立

々 四天王像の造立

宋人石工大仏殿の脇侍像

四天王像・中門石獅子等造有

一一九七 東大寺鎮守八幡宮上棟

々 戒壇堂の造営

大湯屋の鉄湯船が鋳造される

一一九九 頼朝薨去百箇日行勇導師

東大寺南大門上棟

法華堂を修造

一二〇〇 頼朝一周忌 栄西を導師とす

北条政子寿福寺を造営、この

地を栄西に寄付

東大寺尊勝院が再建される

一二〇一 快慶、東大寺鎮守八幡宮の

僧形八幡神の坐像造立する

播磨浄土寺阿弥陀如来立像や

菩薩面等制作

一二〇二 重源による狭山池の大改修

快慶、東大寺俊乗堂阿弥陀

如来立像を造りはじめる
八十六歳にて示寂

参考文献

「頼朝と重源」

奈良国立博物館・図録

「大勲進・重源」

奈良国立博物館・図録

平泉展 文化庁・図録

重源・伊藤ていじ・新潮社

重源・中尾堯・吉川弘文館



総会後の茶話会

編集後記

この数年、あと何年で、第2の人生だと指折り数え、あと少しあと少しと息切れ寸前の状態です。ふと、行基は私の年の時何をしていたのかと『行基年譜』を開けてみると、和泉から難波に活動の中心を移し、精力的に院の建立や社会事業関連施設をされていきます。あらためて行基の偉大さを認識し直すとともに、夏の暑さにクーラーがなければ大阪ではもはや生きていけそうにない我が身の情けなさに、またまた指折りを始める為体です。もう少し我慢すれば本当の秋。今年は旧暦で閏九月があり、少なくとも暦の上では夏ではなく、秋が長いのがせめてもの救いです。
(森明彦)

平成26年度役員

- 会長 吉田靖雄
- 副会長 森 明彦
- 副会長 若井敏明
- 事務局長 鳥居俊作
- 事務局次長 下垣内信夫
- 会計 東野信吾
- 監事 操田邦男
- 幹事 吉良隆司
- 幹事 宇野健二
- 幹事 仙波恒民
- 幹事 中井国芳